『松陰中納言物語』の『伊勢物語』引用について

妹尾好信

中世に成立した王朝風擬古物語が、先行の物語の強い影響下にあることは周知のことである。中でも、最も影響力の大きいのが『源氏物語』であることは言うまでもない。いずれの作品においても、『源氏物語』の影響箇所は容易に指摘することができる。それは時に露骨かつ執拗なまでに表われる。中世擬古物語群が『源氏物語』の模倣、あるいは亜流として低い評価しか与えられない所以もそこにある。しかし、そういった『源氏物語』世界の再現・再生産は、当時の物語享受者の好みや要求を反映したものであって、必ずしも作者の没個性・独創性のなさばかりがその原因ではあるまい。中世の物語作者たちは、『源氏物語』の世界をさまざまな形で自作に取り入れることによって、読者を喜ばせようとしたのに違いない。そして、その取り込み方が巧みであれば、大いに読者の喝采を浴びたことであろうと思うのである。

もちろん、先行物語として擬古物語に積極的に取り込まれたのは、『源氏物語』だけではない。例えば『狭衣物語』は、『源氏物語』と並ぶ傑作として中世の読者たちに大いに愛好された。擬古物語の中には、『源氏物語』よりも顕著な形で『狭衣物語』の影響が表われている作品もある。『あきぎり』などはその最たるものである。

『源氏』『狭衣』と並んで重要な影響作品として挙げられるのが、『伊勢物語』である。すでに『源氏物語』の中にも大きな影響を与えたこの歌物語作品は、中世の擬古物語においてもその影を色濃く落としているものが少なくない。筆者はこれまでに、いくつかの擬古物語の引歌表現を調査してきたが、その過程で『伊勢物語』の歌がいかにしばしば引用されているかを実感せざるを得なかった。

本稿では、擬古物語の中でも比較的成立の時代が下ると見られる『松陰中納言物語』(全五巻)を取り上げて、物語中に表われた『伊勢物語』の影響箇所について考察する。『伊勢物語』の引用と思われる箇所を出現順に挙げ、覚書風にコメントを加える。それによって、作者の先行物語摂取の方法の一面が明らかになればと思う。

なお、『松陰中納言物語』本文の引用は、市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』第五巻(平4　笠間書院)により、引用文の後に、括弧して該当ページ数と行数を記す。但し、一部表記を私見により改めた場合がある。『伊勢物語』本文の引用は、大津有一校注、岩波文庫『伊勢物語』(昭39　岩波書店)による。表現が一致ないし類似する箇所には、『松陰中納言物語』には実線で、『伊勢物語』には点線で、それぞれ私に傍線を付す。また、『古今集』以下歌集の引用ならびに歌番号はすべて『新編国歌大観』による。

〔1〕「人をしづめて」（第一巻①「山の井」）

○人をしづめて、侍従御袖をひきて、「おさな君はそこにこそゐ給はんづれ。われもやがてかへりこん」とて、いれたてまつる。（五五・11）

藤内侍の寝所に乳母の侍従が山の井中納言を手引する場面である。「人をしづめて」とは、人々が寝静まるのを待っての意。この表現は、『伊勢物語』第六九段に、

女、人をしづめて、子ひとつばかりに、をとこのもとに来たりけり。…（中略）…

野にありけど、心は空にて、こよひだに人しづめて、いととく逢はむと思ふに、

とあるのを意識したものと見られる。『後撰集』巻六・秋中・三三四に、「秋の夜は人をしづめてつれづれとかきなすことのねにぞなきぬる」（よみ人しらず）とあり、『源氏物語』夕顔巻にも、「夜深きほどに、人をしづめて出で入りなどしたまへば」云々（全集本・巻一・二二七頁）とあって、特に珍しい言い回しとは言えないが、有名章段に見える印象的な表現なので、『伊勢物語』を踏まえた表現と認めてよいと思われる。なお、同じ表現が〔11〕にも再出する。

〔2〕「藤のしなひ」（第一巻②「藤のえん」）

○その松に藤のしなひの、世にためしなうながう咲かゝり、色ことなるが有けり。（五六・12）

「松陰中納言」の異名の由来となった松陰邸の庭の池のほとりの松に咲きかかった藤のさま。ここに帝の行幸を得て藤花の宴が催されることになった。このあたりの描写は、『伊勢物語』第一〇一段の、

その花の中に、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。

を意識したものと見られる。『枕草子』「木の花は」の段に、「藤の花は、しなひながく色こく咲たるいとめでたし」（新大系本・第三四段）とあるように、藤の花房を「しなひ」というのは常套表現だが、その長さを強調した表現が類似しているので、これの引用と見る。

〔3〕「みたらしのみそぎ」「ありはら也けるおとこ」「身もほろびなん」（第一巻③「ぬれぎぬ」）

○また少将の君は、大納言のみむすめのみたらし川にみそぎし給ふをかいま見給ひて、

いかにせんうき佛をみたらしのみそぎを神のうけぬためしに

とよみをくられしを、…（中略）…

「さればよ、うき恋のためしには、ありはら也けるおとこのたえ入し思ひも身にしられてこそ。かくばかりうき名のたちやすき物

とはかけても思はざりき」とて、…（中略）…
右馬頭の「さしたることもあらざるに、おほけなき事をこそ。身もほろびなん」とおもひ給へるけしきを見給ふて、（六〇・3）

竹川少将がぬれぎぬ事件の陰謀に加わった理由を述べた場面。ここでは集中的に『伊勢物語』の引用が見られる。まず、少将が松陰大納言の娘に贈った「いかにせん」の歌は、第六五段の、

恋せじと御手洗河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

を本歌としたものである。この歌は、『古今集』巻十一・恋一・五〇一にも「読人しらず」として載るが、後に「ありはら也けるおとこのたえ入し思ひも」云々とあることから、『伊勢物語』を念頭に置いていると考えられる。その「ありはら也けるおとこ」の語は、同じ第六五段に、

殿上にさぶらひける在原なりけるをとこの、まだいとわかゝりけるを、この女あひ知りたりけり。

とあるのを引いたものだが、続く「たえ入し思ひ」は、第六五段ではなく、第四〇段に、

をとこ、泣く〳〵よめる。
　出でていなば誰か別れの難からむありしにまさる今日はかなしも
とよみて絶えいりにけり。親あわてにけり。なほ思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、真実に絶えいりにければ、まどひて願たてけり。今日の入相ばかりに絶えいりて、又の日の戌の時ばかりになむからうじていき出でたりける。

などとあるのをさすものと思われる。そして、その後に「身もほろびなん」とあるのは、竹川少将の告白を聞いた右馬頭の心中表現の一部だが、これは第六五段に、

女、「いとかたはなり。身もほろびなむ。かくなせそ」といひければ、

とあるのを意識したものと考えられる。このあたり、『伊勢物語』の表現が第六五段を中心に自在に引用されていることが知られる。

〔4〕「千夜を一夜になせりとも」（同）

○都の御名残のつきさせ給ふまじき事なりければ、千夜を一夜になせりとも、明ゆく空はうらめしからまし。（六四・7）

配所へ旅立つ松陰大納言の心中を付度した草子地。「千夜を一夜になせりとも」というのは、『伊勢物語』第二二段の、

秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りてとりや鳴きなむ

の歌を踏まえた引歌表現である。

〔5〕「さらぬわかれ」（同）

○御かたちのいとちいさうなるまゝに、やがて霧にうづもれたまへば、さらぬわかれの御心地ぞし給へる。（六五・1）

配所隠岐嶋へと旅立って行く松陰大納言を楼の上から見送る藤内侍の心境を述べた箇所である。この「さらぬわかれの御心地」というのは、『伊勢物語』第八四段に、

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

かの子、いたううち泣きてよめる。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千夜もといのる人の子のため

とある贈答に出てくる言葉で、「さらぬ別れ」とは死別をさす。この贈答は、『古今集』巻十七・雑上・九〇〇～九〇一にも載っている。

〔6〕「うづらなくらむ野辺」（同）

○まだきしぐれの程もしらるゝいなり山の紅葉、うづらなくらむ野辺もあとになりて、ふしみのさとにとゞまらせ給へり。（六五・1）

先の〔5〕に続く文である。ここからは配所へ赴く松陰大納言の道中を記した、和歌的文飾に富んだ道行文になっている。言うまでもなく「うづらなくらむ野辺」とは深草の里をさし、『伊勢物語』第一二三段にある「深草にすみける女」の歌、

野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ

によっている。『古今集』では、巻十八・雑下・九七二に「よみ人しらず」として載る。「野辺」の語を重視すれば、この歌を本歌として詠まれた俊成の自讃歌「夕されば野べのあきかぜ身にしみてうづら鳴くなりふか草のさと」（『千載集』巻四・秋上・二五九）の方を直接には意識しているのかも知れない。

〔7〕「かきくらす心のやみ」（同）

○淀のわたりをしたまふに、朝霧のいとふかく立わたりて都の山も見えわかねば、行さきとをき旅の空をおぼしやらせたまひて、

かきくらす心のやみにたちそひて行衛にまよふ淀の川霧（六五・5）

同じ道行文の一節である。この歌の表現は、『伊勢物語』第六九段の昔男の歌、

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとはこよひ定めよ

によっていると考えられる。

〔8〕「心つく」（第二巻④「あづまの月」）

○いとらうたげに、御心ざまのゆうにおはしましければ、よばふ人あまたありけれども、あづまの人にみせんは、いとほゐなき事におぼして、玉だれのうちにのみ過したまひけるを、右衛門のかみに心つけたまひけれども、「打いでん事もいかゞおぼすらん」とお

もひ過し給ひけるに、（六七・5）

第二巻④「あづまの月」の章には、『伊勢物語』のいわゆる東国章段の引用が目立つ。この場面は、下野(下総の誤か)守の北の方が養女としている前右馬頭の娘の結婚相手に松陰大納言の弟の右衛門督を考えていることを述べた部分である。「右衛門のかみに心つけたまひけれども」とあるのは、『伊勢物語』第一〇段に、

父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心づけたりける。

とある箇所の表現を借りたものであろう。「よばふ人あまたありけれども、あづまの人にみせんは、いとほゐなき事におぼして」、母親が都人に目を付けるという状況がまさに合致している。

〔9〕「さがなきえびす心」（同）

○いとはづかしげにひきかづき給へるを、「など月を見給はぬにや。あづまにはかたぶく影を見すつる事のあるや」との給はすれば、「さがなきえびす心も、月にはいとゞみえなむ物を」とほのかにのたまふも、おかしく聞ゆ。（六九・11）

右衛門督と前右馬頭の娘との逢瀬の場面である。恥じらった女が、東国育ちの自分の心を「さがなきえびす心」と卑下している。この語は、『伊勢物語』第一五段に、

女、かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす心を見ては、いかゞはせむは。

とある表現によっている。これも東国章段の一つで、陸奥国の「なでうことなき人の妻」の心をさして言ったものである。

〔10〕「めぐりあふべき空」（同）

○御かへし、

名残あるこよひの月にたぐへつゝめぐりあふべき空なわすれそ（六九・15）

先の場面で、夜明け近くに右衛門督が詠んだ歌への女の返歌である。この歌は、やはり『伊勢物語』の東国章段の一つ、第一一段の、

忘るなよほどは雲ゐになりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで

の歌を踏まえたものと考えられる。〔13〕にも同様の例がある。

〔11〕「人をしづめて」（同）

○　「あひみての後こそ物はかなしけれ人めをつゝむ心ならひにこよひはいとゝく人をしづめて」と有けれども、いかにせんとも思ひわき給はず。（七〇・8）

右衛門督が琴の緒に結び付けて女に手紙を贈った場面である。先の〔1〕と同様、「人をしづめて」の語は『伊勢物語』第六九段に出

る言葉を意識したものである。特にここでは、

こよひだに人しづめて、いととく逢はむと思ふに、

云々の箇所を念頭に置いていると考えられる。

〔12〕「よろこぼひて」（同）

○「この絵はおもしろふ書なしたれば、とのに見せさせ給へ。さもあらばちいさきいぬをたまひぬべけれ」とうちえませ給へば、よろこぼひて、（七〇・10）

女が幼い弟を文使いとして右衛門督に扇に書いた歌を届けようとする場面である。ここに出てくる「よろこぼひて」の語は、『伊勢物語』の東国章段の中の第一四段に、

をとこ、京へなむまかるとて、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひ居りける。

とある表現を引いたものと見られる。「よろこぼふ」は、「喜ぶ」の未然形に継続の意の接尾語「ふ」が付いた「喜ばふ」の転と言うが、他の王朝文学作品に所見のない特異な語である。『松陰中納言物語』の作者は割にこれを好んだらしく、後出の〔23〕でも用いている。

〔13〕「めぐりあはんほど」「わするなよ」（第二巻⑤「あしの屋」）

○中将、

めぐりあはんほどはいつともしら波のあはれをかけよ行末の空

つゐにほゐとげ給はざりしかなしさを、人しれずの給はす。少将、

わするなよ雲の浪路はへだつともともにみし夜の月とおもはゞ（七三・9）

父の流謫に連座する形で須磨に蟄居することになった松陰中将と、鳥羽まで見送りに来た山の井少将との贈答である。この両歌には、先の〔10〕と同様、『伊勢物語』第一一段の、

忘るなよほどは雲ゐになりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで

の歌が本歌として踏まえられていると考えられる。「つゐにほゐとげ給はざりしかなしさ」とは、山の井少将の同腹の妹に対する松陰中将の恋心がかなわなかったことをさす。

〔14〕「しぞうの官人」（同）

○北の方は、かくひきわけ給へるを、なをねたましくおぼして、はりまのくにのしぞうの官人に、ゆかりのおはしけるがまいりけるに、（七五・10）

山の井中納言の北の方が、芦屋に住む美しい継娘（山の井少将の

同腹の妹）を憎む余りに、播磨国の祗承の官人に盗ませようと企む場面である。「祗承の官人」と言えば、『伊勢物語』第六〇段に、

　このをとこ、宇佐の使にていきけるに、ある国の祗承の官人の妻にてなむあるときゝて、

云々とあるのが思い出される。状況に特に類似点があるわけではないが、継子を落ちぶれさせる目的で盗み出す役を担わせるに当たって、落ちぶれて祗承の官人の妻になったというこの話が連想されて、「祗承の官人」が設定されたのであろう。

〔15〕「ひとりのみはあらざりける」（第二巻⑥「車たがへ」）

○君のつれ〴〵ならんをみるだにうたてけれ。中納言はせちに思ひたまへらるゝとはきゝつれども、ひとりのみはあらざる物を、宰相中将はいとたのもしきかたもあるらんなれば、それをこそおもひつけつれ。まづゆきたまふて、心ざしのほどもきゝ給ふて、暮つかた御むかへにわたり給へ」（八二・8）

藤内侍に恋慕する宰相中将と通じた女房少納言が内侍の連れ出しを画策する気配を察した頭中将が、逆に少納言を欺いて車たがえを図る場面である。ここで、宰相中将のライバルである山の井中納言が独身ではないことをさして「ひとりのみはあらざる物を」と言っている。この表現は、明らかに、『伊勢物語』第二段で、西の京に住む女について、

　その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。

と言っているのを借りたものである。山の井の中納言には、芦屋の姫君を虐待した嫉妬深い北の方がいたのである。

〔16〕「ついぢのくづれ」（第三巻⑦「むもれ水」）

○少将に「立よるべき所のあなれば、有つるやうにもてなし給へ」とて、頭中将、田鶴君ばかりを具し給ふて、ついぢのくづれよりいらせ給へり。（八六・14）

竹川少将邸を訪れた春宮が、密かに松陰邸に移る場面である。ここで、「ついぢのくづれ」から入ったというのは、言うまでもなく、『伊勢物語』第五段に、

　密なる所なれば、門よりもえ入らで、童べの踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。

とある場面を踏まえた設定である。あるじなき松陰邸の荒れた様子を表現したものだろう。

〔17〕「あばらなるいたじき」「おきもせずねもし給はぬ」（第三巻⑧「文あはせ」）

○御心よせの治部のつぼねまいりて、「おまへに人あまたさぶらふなれば、しづめてこそ御むかへにまいりさぶらはめ。そのほどは

これに」とて、あばらなるいたじきに、ふりたるしとねをしきてまいらす。そのほどいと久しかりければ、

むぐらふの庭にたもとをかたしきて露にはぬるゝ君をおもへば

とうちながめさせたまへるに、「人をこそしづめさぶらへ。御道しるべを」とて、御袖をとりて、かうらんのもとにたゝせたてまつる。「かなたへまはりて、つま戸をはなちてん」とてゆく。戸のすきまよりのぞき給へば、ともし火かすかに木丁のほかにみえて、おきもせずねもし給はぬ御けはひのいとあてやかにみえ給ひぬ。（九一・5）

車たがえ事件で老女房侍従を邸に留めていることを春宮にからかわれたのを紛らわすために宰相中将が語った話で、前斎宮に懸想していた左兵衛督が、心寄せの女房治部の局の手引で逢瀬を設定して貰う場面である。案内された「あばらなるいたじき」というのは、『伊勢物語』第四段の、

うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

という件の表現を利用したもの。そして、「おきもせずねもし給はぬ御けはひ」の部分は、第二段の、

起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ

という歌を引歌とした表現である（この歌、『古今集』では、巻十三・恋三・六一六に業平の歌として載る）。さらに言えば、左兵衛督が詠んだ「むぐらふの」の歌は、第三段の、

思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつゝも

の歌の用語を意識して使ったもののようにも思える。また、〔1〕と〔11〕で扱った「人をしづめて」の語がここにも使われていることも注目される。「あばらなるいたじき」に関して言えば、この後にも、「あばらなる板まよりしらみそめて」（九二・2）という表現がある。結局、この治部の局は狐が化けたものであって、左兵衛督はまんまと騙されたのであったという。擬古物語『別本八重葎』などを連想させる話である。

〔18〕「みつといひつゝ七とせばかり」（第三巻⑨「おきの嶋」）

○むつきたちしより、いかめしき事のみありつる物をして、我御よはひをゆびおらせ給へるに、みつといひつゝ七とせばかりの春をくりつるに、かばかりいとまありつる事こそなかりつれ。（九五・10）

隠岐嶋で流謫の生活を送る松陰大納言が、新年を迎えて、これほど暇のある正月は今までになかったと感慨に耽ける場面である。この「みつといひつゝ七とせばかり」いう言い方は、『伊勢物語』第一六段に載る紀有常の歌、

手を折りてあひ見しことをかぞふれば十といひつゝ四つは経に

けり

を意識したものである。「十といひつゝ四つは経にけり」は、通常、十年を四回繰り返し、四十年が経過したことを意味すると解されているが、ここの「みつといひつゝ七とせばかりの春ををくりつる」は、時間の経過ではなくて松陰大納言の年齢を言ったものである。「みつといひつゝ七とせ」を三年を七回繰り返したの意とすると、三×七で二十一歳になったということになるが、それでは、成人した子を持つ松陰大納言の年齢にしては若過ぎる。したがって、「みつ」を三十歳の意とし、それに「七とせ」を加えて三十七歳になったことを意味するという考え方（神野藤昭夫氏「松陰中納言物語」『体系物語文学史』第五巻）の方がよさそうである。『伊勢物語』の「十といひつゝ四つ」を、十プラス四で十四年と解する説も古来あるので、その理解に従えば、ここも三十プラス七で三十七ということになる。但し、三十歳を「みつ」と言うのは不審で、「みそ」あるいは「みそぢ」とあるべきであろう。あるいは誤写があるのかも知れない。

〔19〕「みるをとりて、かしはの葉にもりて」（同）

○名残の浪にうちよせる（ママ）けるみるをとりて、かしはの葉にもりて浦人のまいらせけるを、あざりのもとへをくらせ給ひて、

ながれよるかたもあら南うきみるの物おもふ身にうきをみよとて（九九・6）

五月雨の頃、配所の松陰大納言は、阿闍梨の訪れも間遠になって、心の晴れ間がない。そんな折、浦人が海松を柏の葉に盛って献上してきたので、大納言は来訪を促す歌を添えて阿闍梨のもとへ贈ったという場面である。海松と柏の取り合わせと言えば、『伊勢物語』第八七段に、

その夜、南の風吹きて、浪いと高し。つとめて、その家の女の子ども出でて、浮海松の浪によせられたる拾ひて、家の内に持て来ぬ。女がたより、その海松を高坏にもりて、柏をおほひて出したる、柏に書けり。

云々という記述がある。これは津の国芦屋の里でのことであって、舞台も状況も異なるが、『伊勢物語』の場面をそれとなく巧みに引用した表現と言ってよいであろう。

〔20〕「まだ何ごとをもかたらはぬに」（第四巻⑮「やまぶき」）

○さらぬだに春の夜の明やすかるべきに、あかつきちかき程なりければ、まだ仍（ママ）ごとをもかたらはぬに、みすのひま〳〵しらみあひければ、中将、

よこ雲の嶺にわかるゝ名残とてしほるゝ袖に有明の月

返し、

うつゝとも夢ともわかぬわかれ路は袖にやどらぬ有明の月

（一二四・7）

今は成人して三位中将になっている松陰大納言の子息田鶴君が、女院御所で行なわれた舟遊びの折に舟の中から山吹の花を所望した女と契った場面である。夢のような逢瀬であったが、はかなく暁近くになった。「まだ何ごとをもかたらはぬに」というのは、春の夜の短さを強調した表現であるが、これは『伊勢物語』第六九段に、

をとこ、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、子ひとつより丑三つまであるに、まだ何事も語らはぬにかへりにけり。

とある部分の引用である。三位中将はまさしく斎宮と夢のような時間を過ごした昔男と同様な心境だったということであろう。そして、女が男に返した歌に「うつゝとも夢ともわかぬ」とあるのは、同じ段で斎宮が詠んだ、

君やこし我や行きけむおもほえず夢か現かねてかさめてか

の歌と表現が類似している。これも意識されているのであろう。

〔21〕「さゝげ物、山のうごき出たらんやうに」(第五巻⑯「花のうてな」)

○そのほかのさゝげ物、山のうごき出たらんやうに見ゆるに、(一二八・8)

松陰内大臣(帰京後、大納言から内大臣兼右大将に昇進)が僧都(隠岐嶋の阿闍梨)のために造営した御堂の落成記念に催された法華八講の場面。弘徽殿女御や女院も列席して行なわれ、多くの捧げ物が提出されたので、まるで山が動き出したように見えたと言う。この「さゝげ物、山のうごき出たらんやうに見ゆる」という表現は、『伊勢物語』第七七段に描かれた文徳女御多賀幾子の法要の場面に、

人々捧げものたてまつりけり。奉りあつめたる物、千捧ばかりあり。そこばくの捧げものを木の枝につけて、堂の前にたてたれば、山もさらに堂の前にうごき出でたるやうになむ見えける。

とある部分を引用したものである。同じ盛大な仏事の場面であり、「堂」や「捧げ物」の語が共通することから、『伊勢物語』のこの段に連想が及び、印象的な比喩表現を借りたのであろう。先の第八七段を踏まえた表現の例(〔19〕)などと同様、その引用はなかなか巧みで、相当『伊勢物語』に親しんだ人物の所為と思わざるを得ない。

〔22〕「都鳥にも事とひて」(同)

○「とをきあづまのはてまでも、おもかげばかりさそはれてこそさぶらへ。此世にだにもあらましかば、都鳥にも事とひてなぐさめ」とて打なかせ給へば、(一二九・17)

左遷先の東国から帰京した按察使(もとの山の井中納言)を自邸に招いた松陰内大臣が、消息不明の娘(芦屋の姫君、実は松陰の子息右大将の妻になっている)の安否がさぞ気になっていることでしょうと言ったのに答えた場面。遠い東国にいても娘の面影はいつも目

の前にちらついていた、せめて生きていてくれさえしたら、都鳥にでも安否を尋ねて心を慰めるのですが、と言っている。この「都鳥にも事とひて」のフレーズは言うまでもなく『伊勢物語』第九段の、

名にし負はゞいざことといむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

の歌を引いたものである。『古今集』では、巻九・羇旅・四一一に業平の歌として載る。東国にあって遠く離れて行方の知れない娘の安否を気遣う按察使の思いは、隅田川で「わが思ふ人はありやなしや」と都鳥に尋ねた昔男の心境にまさにぴったりだったのである。

〔23〕「よろこぼひて」（第五巻⑬「宇治川」）

○やがてめされければ、よろこぼひてまいり給ひぬ。（一四〇・4）

山吹の女に付き添っていた母親の尼君が、昔親しく仕えていた二位殿（藤内侍）が召している由を告げられ、喜んで参上したという場面。その際に三位中将（田鶴君）は山吹の女との再会を果たす。ここで用いられている「よろこぼひて」の語は、既に〔12〕にもあった通り、『伊勢物語』第一四段の用語である。ここの舞台は東国ではなく宇治であるが、幼い童君の提案した計略にまんまと載せられた尼君の様をやや揶揄的に表現したものと考えられる。

〔24〕「あねはの松」（同）

○「けふ君のふるさとへおもはずまかりてさぶらへ。あねはの松をこそ」とのたまはすれば、（一四六・7）

入水を図った山吹の女を偶然助けて自邸に住ませている三位中将が、彼女と側近の侍女弁の君とを再会させる場面である。「あねはの松をこそ」というのは、同じ『伊勢物語』第一四段に載る、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

の歌を踏まえた表現と見られる。下の句の意味を取って、山吹の女の古里である宇治から弁の君を都への土産に連れて来たと言っているのであろう。この歌は『古今集』巻二十・東歌・一〇九〇では、初二句が「をぐろさきみつのこじまの」となっているから、『伊勢物語』の方を引いているのは間違いない。「あねはの松」には、弁の君が山吹の女の後を追って入水して一緒に助けられた童君の姉であることも響かせているのかも知れない。

＊　＊

以上24箇所を指摘したが、かくのごとく『松陰中納言物語』には『伊勢物語』の引用が多数見られ、その手際はなかなか見事と言ってよいものがある。作者は『源氏物語』に劣らず『伊勢物語』をも愛好していた人物と考えられるのである。なお、物語中の引歌表現に関しては、別稿「『松陰中納言物語』引歌表現考」『広島大学文学部紀要』第57巻（平9・12）がある。併せ参照願えれば幸いである。

――せのお・よしのぶ、広島大学文学部助教授――